

# 連句辞典

東明雅・杉内徒司・大畑健治編

版 B6判  
三五二頁  
三五〇〇円  
連句の実作・鑑賞・研究に  
必須の知識をすべて網羅！  
初心者から研究者まで使え  
る本邦初の連句辞典

本書は、用語篇、人名篇から成る。用語篇は、現在使われている用語を中心に三二四語を選び、意味・用法の解説をし、「参考」欄の引用文は中・近世の諸資料から、用語がどのように記されているかを抄録。人名篇は、近代以降に活用した連句人、俳人五十四人を選び、項目末尾に代表的な連句作品を収録した。また、連句入門の手引き、連句概説、連句略史を付した。近代連句の状況を知る上で貴重なものである。

## 収録項目例

〈用語篇〉 挙句 会釈 一座一句 有心 打越  
思いなし 表八句 懐紙 歌仙 軽み 切字  
景気 五句目 差合 去 式目 四春八木  
〈人名篇〉 天野雨山 伊藤松宇 上田聴秋  
鶴沢四丁 小林見外 下平可都三 関為山  
高橋玄一郎 高浜虚子 中村俊定 野村牛耳

# 連句 第43号 季刊



水原秋桜子編 二三〇〇円  
**俳句鑑賞辞典**

貞徳・宗因から現在活躍中の俳人まで二七〇人の古典的かつ伝統的な名句一〇〇〇を収め、豊かな実作の経験を生かした句作にも役立つ

水原秋桜子編 二八〇〇円  
**現代俳句鑑賞辞典**

結社や傾向にとらわれず現代の代表的な俳人五〇五人の代表作一四六八句を収め、公平に客観的に鑑賞した。俳句鑑賞辞典の重複なし

大後美保編 二八〇〇円  
**季語辞典**

日本の季節にまつわる言葉やスモッグ・不伏指数などをまとめて収録し、春夏秋冬の四季に分類した。気象学者の立場から厳密に季節を分類

中村俊定監修 四五〇〇円  
**難解季語辞典**

古典俳句に使われる季語は今日では意味や表記が難解で正しい解釈や鑑賞ができない。本書はそれらの季語二千語を収め、解説を施す

国語学大辞典 B5-1 六〇〇〇円

国語慣用句大辞典 白石文三編 B5 六〇〇〇円

国語慣用句辞典 白石文三編 B5 六〇〇〇円

国語史辞典 林巨樹他編 B5 六〇〇〇円

日本語語源辞典 堀井杏以知編 B5 六〇〇〇円

京都語辞典 井之口・堀井編 B5 六〇〇〇円

擬音語擬態語辞典 天沼 編 B5 六〇〇〇円

隠語辞典 榎垣 実文編 B5 六〇〇〇円

近世上方語辞典 前田 勇編 B5 六〇〇〇円

花柳風俗語辞典 堀井 杏以知編 B5 六〇〇〇円

明治新語俗語辞典 堀井 杏以知編 B5 六〇〇〇円

難訓辞典 中山 實徳編 B5 六〇〇〇円

名乗辞典 荒木 貞雄編 B5 六〇〇〇円

名数数詞辞典 森 啓彦編 B5 六〇〇〇円

あいさつ語辞典 奥山 益朗編 B5 六〇〇〇円

新版 ことば遊び辞典 鈴木 三郎編 B5 六〇〇〇円

類語辞典 鈴木 広田編 B5 六〇〇〇円

類義語辞典 徳川 實徳編 B5 六〇〇〇円

表現類語辞典 藤原 亨一他編 B5 六〇〇〇円

新版 文章表現辞典 神島 村松編 B5 六〇〇〇円

東京堂出版

101東京都千代田区神田錦町3-7 電話03-3233-3741-2

三つの全国連句大会 (南柏雑記41) ..... 1  
 半歌仙「初昔」の巻異論 (Ⅲ) ..... 東 明雅 ... 2  
 「灰汁桶の」の巻 鑑賞 (Ⅴ) ..... 東 明雅 ... 6

第十四回 俳諧芭蕉忌 第四十七回猫養会 ..... 10  
 正式俳諧興行 協起り二十韻 文 中川 凡  
 二十韻十一巻 捌 東 明雅 梅田利子 加藤道子 神谷安子  
 小林千雪 篠原達子 下鉢清子 須田智恵  
 高瀬美保 橋 文子 百武冬乃

「馬追」付勝練習二十韻 ..... 16

第五回全国連句新庄大会 ..... 文・東 明雅 ... 18  
 作品 五巻 捌 秋元正江 上月淳子 式田和子  
 下鉢清子 東 郁子

芦丈翁俳諧聞書 (Ⅸ) ..... 20  
 歌仙 三巻 捌 坂本孝子 式田和子 ..... 24  
 文音 米谷貞子 山口みづゑ 上月淳子  
 膝送り百韻 一巻 ..... 花の会 ..... 26  
 連句のリズム ..... 竹本義人 ... 28  
 新刊紹介 ..... 25  
 雁帛往来 ..... 29

表紙 (軍鶏) 宮崎龍火子

三つの全国連句大会  
 南柏雑記 41

雅

今年は連句人にとっては忙しい年であった。まず、平成五年七月三日、これは「いなみ」の日というので、全国連句いなみ大会が、富山県井波町の主催で開催された。史蹟めぐり、連句実作会・表彰式・記念講演に、全国から百五十余名が浪化上人ゆかりの名刹、瑞泉寺に集った。国民文化祭以外に地方自治団体が主催して全国大会をひらくのは、山形県の新庄市に続いて二番目であり、会の運営その他にも新庄にならうとところが多かったようであるが、たとえば募吟の形式を歌仙に決めるなど、思い切った改革もあり、関係の方の見識と熱意がこの会を成功させたものである。募吟を歌仙にしたことには、大賛成であるが、実際、蓋を明けてみると全国からの応募は二百三十巻に達し、選者は苦勞であった。これは審査の期間をもうすこし長くするかして改めらるべきだろう。

次に九月三日・四日は、例年の通り新庄市において、全国連句大会が挙行された。この会は平成元年、「おくのほそ道」三〇〇年を期して、はじめて地方自治団体の主催で行なわれた。今回は五回目にあたるというので、連続五回出席者に対する表彰が行なわれたが、この会が連句界に与えた影響と効果の大きさを考える時、むしろ、表彰されるべ

きは連句再興の火をともされた新庄市と関係の方々ではないだろうか。この点、連句協会の方に、真剣に考えていただきたいところである。三日午後一時から前俳人協会理事長草間時彦氏の講演のあと表彰式、そして翌四日は九時半より十二時半まで連句実作。みよりの多い大会であった。さらに、十月三十日・三十一日は「とよた連句恋々まつり」に参加した。

この会の中心はやはり「ころも連句会」、就中、矢崎藍さんで、彼女が昨年出版した「連句恋々」に因んだネーミングである。三十日午後二時から基調講演「芭蕉の恋句」のあと、矢崎さんと西尾在住の画家斎藤吾朗さんのトーク「付けましょまつり」は新聞に応募した付句を軽妙な味で発表してパフォマンズ満点、会場を埋めた三百余名の聴衆を大いに湧かせた。サブ会場では、式田和子さん捌きの笠着連句が、楽しく進行。さらに近松寿子・宮下太郎両氏捌きの歌仙も首尾、連句パーティーでは、「連句のすゝめ」の歌が披露され、やんやの喝采を浴びた。第二日は二十一日に分れて連句実作。ともかく、若い人が会場に溢れ、従来の連句大会に見られぬ活気と明るさと楽しさにみちた会であった。こんなところに連句の未来はかかっているかも知れない。

このように大会が増えると、その大会同士での期日の調整が、今後は必要になるかもしれない。

# 半歌仙「初昔」の卷異論(Ⅲ)

東 明雅

今回はこの作品の付けの手法について考察してみよう。  
まず、付けとは何か、Aという句に、Bという句を付け、この二つのA・Bの中に、Aでもなく、Bでもなく、新しい一つの詩の世界であるBを作る。次はBに、Cという句を付けて、Bでもなく、Cでもない、そしてBとはがらりと違ったCという詩の世界を作る。それが連句の付けというものである。たとえば、

- a おもひ切たる死ぐるひ見よ
- b 青天に有明月の朝ぼらけ
- c 湖水の秋の比良のはつ霜

史邦 去来  
芭蕉

(「蕉の羽も」の卷)

aは白の句で、決死の覚悟を述べたまでであり、bは場の句で青天の有明月を描いているまでであるが、このaとbとを合わせると味爽の秋気の下、まさに敵陣に朝駈けしようとする勇士の傍がありありと浮かび上がる。これがbである。さらにbにcを付けると、もはやここで戦場のイメージ、bはなくなり、広々とした琵琶湖の初霜に被われた大景に、息をのむような気分になるであろう、これがcの新しい詩の世界である。このようにして付けは進行する。これが連句の最大の文芸性である。そして、そのためには、aはa、bはb、cはcと、それぞれの一句が独自のはっきりとした世界と気分をもっていることが必要である。連句

の付けは、映画のモニタージュの手法と同一だと言われるが、モニタージュとは、別々に撮影した二つのカットを衝き合わせ、一つの新しい世界を作り出す手法である。この場合、一枚一枚のカットがおぼろげで、何を撮っているのか分からぬようであっては、それを二枚衝き合わせても、真に新しいものが生まれ出る可能性はないであろう。それと同じで、付けの条件として、まず、前句も付句もそれぞれが端的な表現で、力強くその内容を押し出していなければならぬのである。

ところで、この「初昔」の卷、今回はウラ七句目から十句目までを取り上げて検討することにしよう。

- a ふとこころに骰子入れて月の山
- b 姫の素足の草の露踏む
- c きぬぎぬをSilk Silkと訳し棄て
- d 水よりあげて公魚の照り

陸郎 隆 實  
陸郎 實

このaとbとを付け合わせて、どのような新しい詩の世界を創り出すことができていくだろうか。aは、まさか国定忠治の赤城山ではないが、このような事をするのはどういう人物か、どうもはっきりしない、曖昧である。それはこの一句の中に、ふとこころか骰子とか月の山とか、それぞれ印象の強い言葉が三つも混在し、一句としての共通なイメージを醸し出すことができないからである。

(「はせをの芸術」芭蕉の本 4 四八頁)

『二つの相反するものの融合』ということ、ゾルガーというドイツの美学者もボードレルもイロニー(「奇遇」とでも訳してみてもよいと思う)といっている。そうしたイロニーがなければ芸術が存在しないと彼らは思っている。それは超自然の存在であり、論理の世界を超越して、矛盾が矛盾でなくなることを意味する。芭蕉の「俳」はこの「イロニー」にあたるものである。』  
西脇順三郎がここで芭蕉の「俳」と述べているのは、芭蕉の俳句(発句)についてののみであり、俳諧(連句)について述べたのではないことに注目すべきである。

なるほど、俳句(発句)は、矛盾付の理論で片づけることはできるだろうし、矛盾付の手法で創作することも可能である。しかし、俳諧(連句)は西洋の文芸には見られない、三句の転じというものが入っている。西脇氏が、その点に気づかなかったのは、あるいは当然だったかも知れないけれども、その見落しが、実は最も重大な問題なのである。ところで、また「初昔」の巻に戻ると、

- b 姫の素足の草の露踏む
- c きぬぎぬをSilk Silkと訳し棄て

陸郎 隆

このbとcとではどのような新しいcが生まれてくるであろうか。cの作者は次のように発言している。

前の句の八姫の素足の草の露踏むVで王朝ふうな雅やかになったので、それを何とか壊さねばと思ひまして。このお姫さんは虫めづる姫君のたぐいで、つまり課題で

それに対してbの句は、おそらく、このあたりが恋の座であると考へ、姫の美しい露を踏む足を考えたものである。前句のaは一句としては「月の山」という雅なものよりも、「ふとこころ」・「骰子」という俗なものイメージが強いので、前句と全く対蹠的な美しいもの、あえかなるもののイメージで付けようとしたのが、このbであった。この前句と全く違った事物・雰囲気・イメージで付けて行く手法、これは凡そ二十年前、信大連句会の連衆の一人であった。詩人故高橋玄一郎氏が考案され、矛盾付と名づけられたものである。

- (高橋玄一郎全集 第一卷 落落抄 七八頁参照)
- フランス菓子にききしリキュール 玄一郎
- 肉を挽く肉屋よ月のムンク展 静生
- 独房にきく蟋蟀の雨 玄一郎

青き踏むシンナー遊びに魅せられて 真彦

水族館の人魚長生き 實

せんべいの塩味のり味カレー味 節子

たとえば、この作品の一句一句について、その付心を説明することは難しい、要するに前句と全く異ったもの、なるべく離れたものを付けるのであるが、この非連続の連続には、否定できない存在感、一種のおもしろさが存在することも事実である。この矛盾付の手法は玄一郎氏のみに限らず、近現代詩人の作詩の手法の一つではなかったか。そう言えば、私はここで西脇順三郎氏の説を思い出す。

「きぬぎぬ」というのが出たら、それを「Silk Silk」とやっけてのけるくらいの闊達なお嬢さんというふうにしてみたのです。

ここで、この一座の連衆の手法は、紛れもなく玄一郎氏から流れ出た、いわゆる矛盾付けであることが判然とする。これは前にも言った通り、玄一郎氏だけでなく、詩人・俳人（俳句の作者）に共通する普遍的な手法であり、その人々が、詩や俳句を作っている限りは、最も有効であろうが、連句では、この矛盾付けだけで押し通すことは不可能であり、失敗の原因となるのである。

それは、連句というものは前句と付句のみでなく、常に打越を意識し、むしろ、まる反対であるべきは、打越と付句との関係だからである。このbとcとで、王朝ふうの雅やかさからは脱却したcが誕生したのであるが、さて、打越の「ふところ」に骰子入れて月の山」とくらべてみるといかがであろうか。

この句の作者が前句の王朝風の雅やかさを脱れようとしたことが、打越の「ふところ」・「骰子」の境地と極めて近いものになったことは否定できない。

きぬぎぬをSilk Silkと訳するようなお嬢さんならば、ふところに骰子を入れて月の山を散歩するようなこともし兼ねまい。どちらも、目の句になっているから一層始末がわるく、見様によっては、完全に輪廻となるであろう。

私はこの一連を見ると、どうしても貞享五年九月、深川芭蕉庵で作られた「雁がねも」の巻の一連を思い出さずに

されている。それは玄蕃といういかにも名門らしい厳めしいひびきが、足駄はかせぬというきびしさに、よく位が合っているために、はっきりした玄蕃のイメージが浮かび上がった為であろう。

その次の付合、これはあまりに有名な芭蕉の恋句であるが、それだけのすばらしさを持っている。前句を足駄をはくことをためらっている男性と見て、付句はあまりにもかほそく、あてやかな女君を向付にしたもので、両句相俟って纏綿の情尽きたい艶麗な場面を作り出している。これは前句の「雨のあけぼの」という語のもつなまめかしさを手がかりに、後朝の恋に舞台を転じたもので、いわゆる「うつり」の付けであろう。

このように芭蕉の付句は「位」とか「うつり」とか、あるいは「におい」とか、いわゆる余情付であり、疎句（前句と付句が離れているもの）も多いけれども、親句（前句と付句が近いもの）も結構交じっている。このように親句と疎句が入りまじっていることが一巻の調子を豊かにするもので、矛盾付け（疎句）一本やりの作品は、勢い単調になっただけの当然であろう。

さらに「初昔」の巻の残ったもう一句を点検してみよう。

c きぬぎぬをSilk Silkと訳し棄て

d 水よりあげて公魚の照り

dの作者小沢實氏は「シルクの艶に合うように考えてみました」と言っている。この句は矛盾付ではなく、芭蕉俳諧の余情付、「うつり」とか「におい」とか呼ばれる付け方

は居られない。

此里に古き玄蕃の名を伝へ

足駄はかせぬ雨のあけぼの

芭蕉  
越人

きぬぎぬのあまりかほそくあてやかに「初昔」の巻のb「姫の素足」が、この「足駄はかせぬ」からの連想であり、その次に「きぬぎぬを」が登場するのも、この「雁がねも」の巻の恋句があまりに優れているから、その「もどき」(擬)、あるいは「もじり」(擬)であることは明らかである。

誤解をさけるために一言しておくが、私は決して、「もどき」(擬)や「もじり」(擬)が悪いと言っているわけではない。すでに拙著「連句入門」(中公新書)一〇二頁にくわしく述べている通り、俳諧そのものが、いわば「もどき」(擬)に外ならないと考えているからである。「もどき」(擬)・「もじり」(擬)をすることは、いわば俳諧の本質であるから、それは決して咎むべきではないけれども、「もどき」(擬)や「もじり」(擬)をやる場合にも、その句が内容の変化によって、打越と障らないか、輪廻にならないかを十分検討する必要がある。

それにしても、この「雁がねも」の巻の見事さはどうであろう。玄蕃という王朝のころの職名は人名として残り、名字帯刀御免の名主・郷土の家柄である。その家の格式に恐れて、百姓たちは雨の降る朝でも、足駄を穿いて出入する者はないという意味で、前句と付句とによって、玄蕃というものの、その郷における権力のさまがはっきり描き出

であろう。艶なるものの照合という点では成功している。

これが、この二句だけで終る作品ならば、それでもよいだろう。しかしながら、俳諧(連句)の中では、この句も全く打越を考えていない。打越の

姫の素足の草の露踏む

これこそ、まさに艶なるものであり、きらきらした草の露をふむ姫の素足の艶麗さは、まさに水からあげられた公魚の肌の輝きと等質のものではなかったか。ここにも三句の転じが忘れられている。

以上、私は「初昔」の巻から四句だけを取り出して、その付けの特色と欠点を指摘した。残った十四句についても大体、同じ調子である。

結論として、この作品に用いられたのは、詩や俳句に常用される、いわゆる矛盾付であり、それは作者が詩人・俳人であるこの作品に取っては当然のことかも知れないけれども、俳諧(連句)では、三句の転じというものが一番大切であるから、前句のみを考えて、その反対を付けて行く手法では不十分であり、この作品の場合は大むね失敗と言わざるを得ない。しかも、句によっては、五・七・五、十七文字の中に、発句(俳句)的な二章体の句を含んでいることも、反省の材料であろう。

詩人・俳人で、近ごろ連句に興味を持つ人が多くなったのは結構である。しかし、連句をやるからには、連句の文学性、その特質に思いを致し、十分にその独自の手法を学んで欲しいと思うものである。

# 「灰汁桶の」の巻鑑賞 (V)

東明雅

(承前) 私はその遊女屋的性格を強調しすぎると、また恋句になりにかねないと考えていたが、この句自体としては、そのような点は抑制され、ただ、熱い風呂そのものを堪能しているのだから、この説に賛成することにした。

この場合、前句の金鏝は武士である必要はなく、むしろ町人の裕福で伊達者であろう。「あつ風呂ずき」に、この人の寛濶な気分が窺われる。

あつ風呂ずきの宵々の月

凡兆

町内の秋も更行明やしき

去来

(現代語訳) あつ風呂好きで、毎宵ごとに入るのであるが、町内には明屋敷があつて、秋もふけゆく折から、一しおの哀れを感じる。

(付心) 時節の付けであり、其場の付けでもある。「宵々の月」にはしみじみとした寂しさがある。それが「秋も更行」に移っている。移り(うつり)。違付け(説明は後出)。(転じ) 遣句(人情なしの句)を出して、人事句のねばりを取る。活気ある気分から寂漠の気分に移る。

(補説) この風呂も銭湯あるいは遊里の風呂と解すべきで

あつ風呂に入つて爽かな気分の男と、その窓外の明き屋敷、空地のままに放置されて、雑草が生い茂り、月が照らすままになっている寂寥の気分、これはまるで反対のものを付けて、しかも、大きな調和、複雑な人間社会の運命、それに対する観想を描き出した、いわゆる違付けの方法である。

しかも、この付合は類似の音の反覆をうけて、各々、頭韻をふみ、相照応している。

あつ風呂ずき(ずき)の宵々の月(つき)

町内の秋(あき)も更行明(あき)やしき

町内の秋も更行明やしき

去来

何を見るにも露ばかり也

野水

(現代語訳) 秋もふけ行くころ、町内の明屋敷には、どこも生い茂る雑草に露が繁くおき渡しているのを見ると、涙の種ならぬはない。

(付心) 観相の付け(栄枯常ない世相を観じたもの)。前句に漂う哀愁の気をうけて、はかないものの象徴としての露を付けた。句いの付け。「二弟準繩」(安永二年刊)の付合十五条のうち、寂の例証として、この付合を挙げ、「伝曰、前句の明屋敷を見れば露ばかりなりと、只寂にて付る。是らもはなやかなる句の続きたるをしづむる付方と知るべし」とある。さらに次は花の句なるを考えて、秋から春への季移りを容易にする為に、露を出した遣句(補説)

(転じ) 打越「あつ風呂ずき」の、寛濶な気分とは対蹠的

あろうか。あつ風呂に遊び人・伊達者の感じが残ることは事実であるが、この場合は、その点をあまり強調しない方がよいのであつて、むしろ、自宅の湯殿から見た景色と解した方が、付句の気分とよく合うような気がする。この作品は京都で作られたのであるが、当時の上方は江戸にくらべて、湯殿をもっている家が多く、従つて銭湯に行く人はすくなかつたと言われている。そして、細かいことを言えば、この風呂は蒸風呂ではなくて、水風呂で湯をわかして入る温浴であるような気がする。もともと風呂というものは閉めきつて蒸気をもらさぬ構造である。これに対して、水風呂は浴槽に焚口をくつつけたいわゆる五右衛門風呂の類であるから、簡単なものであり、たとえば同じ「猿蓑」の「鷲の羽も」の巻に、

湯殿は竹の簀子わびしき

芭蕉

茴香の実を吹落す夕嵐

去来

とあるのに、情景・気分ともに極めて似通っている。この湯殿はもちろん温浴に用いるもので、その湯殿から眺めたものが、一つには明やしきであり、一つは茴香の夕嵐であつたというわけであろう。

である。打越の他の句をここでは自の句に転じている。

(補説) 花前に露を出すことは季移りの一つの方法であつた。裏の八句目あたりは月の定座である。この月を秋で出した場合、九句目・十句目は当然秋であり、十一句目は花(春)となり、季移りをしなければならぬ。この際、露が一番よく利用された。

何を見るにも露ばかり也

野水

花とちる身は西念が衣着て

芭蕉

(現代語訳) 花のように散る無常の身を観じて剃髪し、西念坊となつて、墨染めの衣を身にまとう事になつたが、まことに一切有為のこの世は如露亦如電である。

(付心) その人の付け。観想の付け。前句の無常感をそのまま付けている。花にあこがれ、願はくは花の下にて春死なんそのきさらぎの望月のころ、と歌つた西行法師の俳付でもある。「草々の露を発心と見るは趣向にて、西念の名に姿をつけ、散る花の無常に一句をしづめたらん。爰を句作の手づまとするべし。爰をもて我家には趣向を定むる法ありて、それを執中の法とはいへり」(支考編俳諧古今抄)

(転じ) 打越は場の句、この句は人情他の句であるが、一句の淋しい気分は変化していない。

(補説) 西念というのは、西方浄土を念ずる意で、たとえば馬士に六蔵、丁稚に久三、鍛冶の徒弟が二蔵という類の江戸時代、念仏僧の通名。

花とちる身は西念が衣着て

木曾の酢茎に春もくれつ、

芭蕉  
凡兆

(現代語訳) 無常を覗じて出家した今、木曾の山中での食味は酢茎であったが、そのたべごろも今は過ぎ、春も昏れようとしている。

(付心) 其場の付けでもあり、時節の付けでもある。また、木曾にかくれた隠遁者のわびしい生活と述懐は、ここに住んで「おもひたつ木曾の麻衣あさくのみ染めてやむべき袖の色かは」と詠んだ、兼好法師の俳付とも見られよう。

また、西念の衣に木曾の酢茎はいかにもふさわしい食味で、いわゆる位付けとなっており、さらに前句の「花と散る身」と付句の「春もくれつ、」は無常感に惜春の情が微妙にからみ合って、一種の匂付である。

(転じ) 大打越あたりから続いている淋しい気分からは転じて得ていないが、この句には、木曾という地名、酢茎という食味など、変わった珍しいものが出てくるので、その辺にやや軽くなり変化が見られる。

(補説) 酢茎についての説明は、「芭蕉俳諧研究」に出てくる小宮豊隆氏の報告が一番くわしい。要点は左の通りである。

木曾(木曾の内でも酢茎は奈良井敷原の方では余りつくらない。本場といえば恐らく福島を中心として御嶽山麓地方が本場なのだろうという)では矢張是を今日でもススキと言っているのだそうである。秋十一月の中旬から下旬にかけての時分、漬菜又は大根菜を、そのまま或は刻んで、

もそのままににじみ出て、よい付味である。

(転じ) 打越は道心者を描いているが、この句は、たまたま木曾路に淹留した旅人の望郷の感懐である。淋しい物悲しい気分は転じていないけれども、その質はやや変化している。

(補説) 「山陰伝ふ」という何かひそやかな語気は、実際山が四方に迫っている木曾の峡谷にびったりであるとともに、貧しい「木曾の酢茎」が漂わせる侘しさと呼応して、一句の余情をさらに高めている。四十雀は留鳥であるが、冬里に下りていた小鳥が、春になって山に帰って行く。春の季語「鳥帰る」。

かへるやら山陰伝ふ四十から

柴さす家のむねをからげる

野水  
去来

(現代語訳) 柴をさした家の棟をからげて修理していると、四十雀が山陰を伝って飛んで行くのは古巣に帰るのであるうか。

(付心) 起情の句であり、其人の付けでもある。

(転じ) 打越は淋しい・暗い気分であるが、この家の修理は、おそらく祭事に関係したもので、村人が大勢で行なっていると思われる。気分が漸く活気づいたものになって来た。

(補説) 従来の説では、たとえば麦水の「屋の漏に必ず柴をさす。里家の体」となっており、粗末な山家の家の修繕の体としたものが多かった。しかし、これではいつまでも

ざっと湯を通し、それを塩気のない(酢茎はひどく塩気を嫌ふものだから)桶に入れ、その上にススキの素を入れて桶を密閉して置けば、二三日するともうその菜が醗酵して、醗甲色を帯びた酢茎になっているのだそうである。この酢茎を喰う期間であるが、木曾で酢茎が最もうまいとされる期間は、正月頃から寒の明けの時分までだとされているのだそうである。三月の終あたりから四月頃の暖かい季節になると、酢茎桶の中に白いものが出来、酢茎がねばねばして味が甚だ良くなる。それで皆喰わなくなる。それから酢茎の喰い方であるが、是を木曾では、最も多く蕎麦のしたじに入れて喰うのだそうである。ススキそばという名前さえ出来ている位だという。もっとも外に、味噌汁の中へも入れれば、そのまま漬物と同じ様に醬油をかけても喰う。元来酢茎の味は、少し酸味があつて、軽い落ついた味で、馴れば馴れるほど、うまくてたまらないそうである。

木曾の酢茎に春もくれつ、

凡兆  
野水

かへるやら山陰伝ふ四十から  
(現代語訳) 山陰を伝って四十雀の群が飛んで行くのは、古巣に帰るのであるうか。その鳥を見るにつけても、自分は木曾路に止まって酢茎に今年の春も送ることであるよ。

(付心) 其場の付け。木曾に対して山陰、酢茎の野趣に対して四十雀も位よく、うつりがよい。また、「春もくれつ」という晩春のはかなげな余情に、「帰るやら」と応じたのも「やら」の字に、それを眺めている者の様子・心境

木曾の山中から気分が抜けられない。

もともと、しばさし(柴挿)というのは、祭に先立つ物忌みのとき、その印として柴をさし立てることを言うのであって、単に屋根の破れを柴で修理するのではない。「日本民俗事典」によれば、柴挿し——祭の忌に入るしに柴をさしたて、また祭場の境を示すために柴をさし立てることをいふ。神挿しも同様である。頭屋神事の柴挿しは、祭場の中心にさすもので、祭場と祭りの象徴の意味があり、柴は神の依り代とも考えられる。柴を挿した中は必ずしも聖なる神域というだけではなく、死霊・悪霊のようなものを含めて、柴の垣で囲う必要があつたのであるう。

山に野宿するとき周囲に青い柴をさし回すのも、山の神の神域を侵さないだけでなく、山の神の崇りなどから身を守る意味もあるう。

たとえば、黒川能を行なう頭家には、当屋花というもの

### 歳旦三つ物の作り方

- ① 発句・脇・第三の形式はそのまま守ること。
- ② 表六句の禁忌は解除し、三句の中により広い世界を取り入れること。
- ③ 新春を祝うめでたい気分であること。
- ④ 来年の御題は「波」なみ・は」。

第十四回 俳諧芭蕉忌

第四十七回 猫蓑会

平成五年十月二十日  
於 江東芭蕉記念館

恒例の芭蕉忌を十月二十日(水)深川芭蕉記念館で修し、  
正式俳諧を興行した。その後、二十韻十一巻を首尾。参加  
者五十七名

第一部 正式俳諧興行 「冬籠り」 一卷  
第二部 二十韻 十一巻

(一) 役割

宗匠	中川 哲
脇宗匠	豊田 好敏
副宗匠	今宮 水壺
執筆	佛淵 健悟
知司	権藤 和弥
副知司	佐藤 良弥
座配	峯田 政志
座見	杉内 徒司
花司	秋元 和彦
香元	海野 海砂
配硯	中川 凡
同長	亀井 典明
老杉	江杉 亭

(二) 次第

- 一 席改め
- 二 席入り
- 三 配硯
- 四 献花
- 五 執筆呼び出し
- 六 文台捌き
- 七 俳諧興行
- 八 花前
- 九 献香
- 十 花の句披露
- 十一 端作り
- 十二 吟声
- 十三 文台返し
- 十四 作品奉納
- 十五 納硯
- 十六 挨拶
- 十七 退席

脇起り二十韻 冬籠り

捌・中川 哲

冬籠りまた寄りそはんこの柱  
 鶯の声がせかず炬開  
 公園にキャッチボールの子ら群れて  
 鉛の袋が枝にかかれる  
 野分雲薄れて清き月の影  
 水夫爽やかにベニス恋歌  
 蟪蛄に似た彼の目にしびれたり  
 党首五人が入る内閣  
 幻の酒二合半で陶然と  
 胃心肝膝腎検査パス  
 女性陣これみよがしに夏祭  
 風鈴の下将棋さす人  
 セクハラと良き夫演ずうちのパパ  
 抱いて寝かせぬ夜もありけり  
 凍てし道月に振りむくのっぺらぼう  
 お茶ばかりして過ぎし一生  
 老僧の夢は船旅汽車の旅  
 仔猫の名前やっと決まりぬ  
 花万朶訪ふひとの高調子  
 春の匂ひの満つる前庭

翁  
 明雅 杉亭 徒司 良弥 和弥 水壺 和彦 好敏 政志 凡 央子 淑代 典明 かりん 蓉子 恵美子 碧 哲 執筆

猫蓑派の正式俳諧、昭和六十一年から毎年興行して来て、そのイメージも大分変化して来た。式の花形である執筆も、はじめは中川さん・豊田さんと男性であったのが、第三回の秋元さんの登場以来、すべて女性に占有されて、式田さん、副島さん、内田さんと華麗な文台捌きが続き、中で一回福井隆秀さんの奮起によって、失地を恢復したことはあったが、うかうかしていたその中に、宗匠、脇宗匠そして、花司、香元はもちろん知司、副知司、座見、座配もすべて女性に占拠されてしまった。配硯は初めから女性にお願いして来ただけに、昨年など、すべての役は女性のものとなり、男性は徒らに身の不遇をかこつのみ存在となっていたのである。

もちろん、昔と違って男女同権の時代、俳諧は相撲と違って、あなたがち女性を拒むものではないから、女性による女性の正式俳諧はそれなりに結構で、花やかであり、優雅であり、楚々として魅力のあるもので猫蓑の正式俳諧の最大の魅力となったのであるけれども、それも度重なれば飽きられもしようというものである。

いつか野郎どもばかりの正式俳諧を試みて、繊細のかわりに素朴、優雅のかわりに莊重な、いかにもどっしりとした式を行なってみたいと私はかねがね考え、適材を適所にと苦心惨胆、作り上げたのが、今年の正式俳諧役割表なのである。心ある人には分かっていただけると思うが、私はプロ球団の監督稼業の辛さと楽しさを、味わえたように思う。

(雅)

水の秋

東 明雅 捌

水の秋昔深川橋幾つ  
 松手入して煙草一服  
 ビル管理月を便りに巡るらん  
 ファミコンゲームに夢中なる児ら  
 婿専務社長はをんな盛りなり  
 わたしを産んだ血筋好色  
 むささびの飛行ひとつの処生術  
 大寒小寒小僧山から  
 鬼殺し稿に悪いと知りつつも  
 手ぶりで通ず外国の旅  
 不景気にブランドブーム何時か消え  
 万太郎忌にすする掛け蕎麦  
 月の窓はつきし蛾を仰ぎみて  
 ぞっこんの女ひとまはり上  
 神託のままに耳吸ひ口を吸ひ  
 通りぬけられません横丁  
 ハーモニカ廃校の町なつかしき  
 享保雛を飾る婆様  
 花見鯛大組板にとっかりと  
 臨時増発春のはとバス

明雅 蕉風の古式床しや石路日和  
 かりん 今し翔び立つ屏風絵の鶴  
 和子 溪流に釣果自慢の切りもなし  
 喜久 緑のワイン提げて来し友  
 志紅 月高く聖チチリアのミサの曲  
 ん 想ひは還る木の実ふる森  
 紅 山装ふ女体かすかな露天風呂  
 和 噂の二人宿に戻らず  
 久 農業を継ぐ気も失せてOターン  
 ん 猫もしゃくしもナタデココ食ふ  
 久 子々は叩けば潜るいっせいに  
 紅 原爆忌なり淡き月暈  
 和 脈を取るナースの胸のふくよかに  
 久 人には見せぬ心中の傷  
 紅 おろしやのとんだお土産お断り  
 雅 すやすや眠る揺り籠の嬰  
 ん 喜寿迎へなほ綿々と芸磨く  
 久 残雪の嶺光る沼の面  
 和 園遊会御苑の花は満開に  
 ん どんと届きし鯛の浜焼き

利子 翁忌や墨田にかかる橋渡る  
 正敬 背黒鷗と競ひゆく船  
 シズ リビングのカーテンの柄はなやかに代代子  
 啓世 漫画マガジン読み散らす子等  
 碧 月昇り明日は初日と総稽古  
 世 不知火みんと誘ひ誘はれ  
 敬 湯疲れを休める床に虫の声  
 碧 選挙改革必死なる殿  
 ズ 創業は嘉永三年弁当屋  
 世 ヨード卵の黄身のもっこり  
 碧 プランター絹糸草を植ゑ替へて  
 敬 はばかりも無き夜濯の音  
 ズ 駅頭の流れ止めても抱き合ひ  
 敬 親父ゆづりの惚れっばい俺  
 碧 サークスのテントの上に凍てし月  
 ズ 猫と語りつ酔ふは又造  
 敬 夢一字かけ軸の夢ふくらませ  
 世 春の社の四手をくぐりぬ  
 ズ ナビ乗せて新車で花の切通し  
 碧 山の上まで畑打ちの人

梅田利子 捌

加藤道子 捌

石路日和

翁 忌

霧時雨

神谷安子 捌

琴唄の旋律ゆるし霧時雨  
 栗名月を待ち望む子等  
 下り築長靴穿きて見廻らん  
 ウエストボーチ煙草ライター  
 エアポットはったり逢った過去の彼  
 嬉し口惜し憎し愛ほし  
 飼犬が隣の犬にからみつく  
 稲荷の幟風にはたはた  
 冷酒に限ると胡坐独り者  
 元は落研洗ふ夏足袋  
 チャンネルを回せどタレント同じ顔  
 関西からの多き出稼ぎ  
 爪に火を傷舐めあつた仲なのに  
 心の妻は雪女郎なり  
 凍豆腐干したる軒に月皎と  
 ふっと思ひし母の好物  
 定年の父はひねもす杖を曳き  
 麝香あげはのくぐる山門  
 奥千本中千本の花万朶  
 古きを尋ね野遊びの我

安子 時雨忌や船の牽きゆく大筏  
 杉亭 千鳥鳴きつつ遊ぶ川波  
 一元子 子に習ふパスタソースの仕上りて  
 一恵 とりどりの色試すパレット  
 利子 月の下農村歌舞伎見栄をきる  
 元 部に透ける額ひややか  
 恵 愛拒む尼僧に迫るをとこへし  
 元 働きものの知能ロボット  
 亭 核廃棄エリツイン呼べと民の声  
 恵 異邦人らし地図を片手に  
 利 夏茶碗薄茶の席の彫三鳥  
 亭 稜線仰ぎ髪洗ふ月  
 利 思案して口説きことばの小抽出  
 亭 妻のお出掛けリング外して  
 恵 渋滞中新車・中古車・盗難車  
 元 下の躰けのまだ足りぬ犬  
 恵 少年のいっ気呑みして老い易く  
 元 陽炎のなか夢を夢みる  
 安 西行を偲びて座しぬ花明り  
 利 階高くのぼりゆく蝶

千雪 殿原の足袋の白さも桃青忌  
 あかり 凧と活けたる壺の寒菊  
 淑代 縄跳びのひいふうみいと数へみて  
 和弥 チューインガムをポケットに入れ  
 淑子 屋根の上猫が見あぐる巴里の月  
 代 抱擁のあと残る螢火  
 代 早稲酒に酔へば処女に見えもして  
 代 野党馴れせぬ自民領袖  
 弥 授業中呼び出し音で席を立ち  
 淑 葉をはさむ推理小説  
 同 山裾の重なり合ひて北国へ  
 同 武者人形はお爺ちゃんに似る  
 同 月影のボーダー模様霞戸嵌め  
 同 天井向けば乳房平らに  
 代 修羅恋の果ては拳銃かくし持っつ  
 代 マリア観音にこやかな笑  
 弥 雨あがるオーレオレオレJリーグ  
 雪 家中総出荒布干すなり  
 雪 花万朶古き城跡自転車で  
 淑 雲雀たちたる叢の揺れ

小林千雪 捌

篠原達子 捌

時雨忌

桃青忌



